

今年、佐佐木信綱生誕百四十年の年となる。同じ年に生まれたのは鳥崎藤村、樋口一葉。その翌年に生まれたのが泉鏡花と与謝野鉄幹。すでに歴史上の人になったという感じがする。

今年の全国大会は名古屋で開催するが、「信綱」をテーマにしようということになった。今だから見えてきた信綱の問題も少なくないはずである。

水の辺の夜が差し出す恍惚のアッセンバッハのふりむける顔
中西由起子

ヴィスコンティの映画「ベニスに死す」をうたうが、うまく抽象化が果たされていて、映画から離れて独自のイメージを作りあげている。初句、結句がとくに、上手い。映画の主人公・アッセンバッハはドイツ人、五十歳の男性で、偉大なる指揮者・作曲家。

鉱石のごとき蕾を巻き締めて椿のねむり深く長かり
峰尾碧
椿のまだ固い蕾に取材した取材感覚に注目。「巻き締めて」という表現が味わい深い。

林道を駆ける前夜の大雨が濡らした空気の粒感じつつ
木村俊介

この一首だけを読んだのでは分らないが、前の歌と合わせ読むと、馬に乗って走っている場面だと分かる。「林道を駆ける」で切れる。「雨が濡らした空気の粒」という表現が独特。

短歌の現在

No.379 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

絶ゆることなく川薄く流れ水紋は型を守りて陽を反したり
岡田恵美子

上二句字余りで、やや読みにくい。「絶ゆることなく・川薄く流れ……」と七・八で読み、以下、五・七・七で読むのがいいようである。底の浅い川に陽がさしている。一カ所、水底に凹凸でもあるのか、川面に水紋ができている。それだけの光景だが、丁寧に表示されているその丁寧さに惹かれて、読者は頭の中でついついそのイメージを構築したくなる。そんな挑発力に注目。

むめさんの手紙はぎつしり五、六枚 香住の海の色
思はせて
荻野美佐子

「心の花」の古い会員、故・岡村むめさんの手紙である。蟹と餘部鉄橋で有名な兵庫県の香住に住んでおられた。ぎつしり書かれている手紙にこめられた心と思いが、「香住の色」の海」を思わせるのだ。

スカイプの画面に向かひ子が歌ふ「雨降りお月さん」の調子つばづれ
大口玲子

「スカイプ」はマイクソフトのインターネット電話サービス。つまり、テレビ電話でうたっている場面。具体的な曲名、結句の突き放した言い方がポイント。

門を出る訪問入浴サービス車屋根につぶれた柿のせ
通りがかりに見かけた光景と思う。初句「門を出る」がうまい。この出だしによって、読者の心に具体的な場面のイメージが的確に呼び起こされる。

鈴木陽美